

## 巻頭言

## 土地改良と風土

青木あすなる建設株式会社  
代表取締役社長

上野 康信



当機関紙「土地改良」の表紙を飾る四季折々の美しい自然、農村風景を見るたび、私は心が癒されます。内容もさることながら毎号の表紙写真を心待ちにしている、というのが本音です。

そして、この表紙写真を見るたびに「風土」という言葉を連想します。同時に、学生時代に読んだ和辻哲郎氏による「風土」の内容を思い出します。この本に関しては評価に賛否両論があるようですが、その時には「日本という国土に生まれてよかった」と単純に喜び、感銘を受けたものです。

一般的に日本の風土論として「日本では熱帯的気候と寒帯的気候が共存し、四季の明確な変化、多くの島からなる国土など様々な景観や気象変化を見せる風土から古来より風土観が育まれ、風土は日本人の生活様式や思考様式を探る原点のひとつとして考えられてきた。風土という概念を考える場合、単なる自然現象の他に人間存在や歴史的・文化的な背景も考慮しなければならない。」という捉え方があるようです。

日本においては、太古の昔から土地改良が営々と営まれて来ました。現在の農業・農村のインフラ・ストックは、そのストック効果故に数百年の長きにわたり改修、改変を経て生き残ってきたものばかりです。先程の風土論に基づけば、まさに農業・農村インフラそのものが日本の風土を形作るうえで大きな役割を果たしているのでは

はないでしょうか。

昨年度「新たな土地改良長期計画」が策定されました。強くてしなやかな農業・農村を目指し持続的発展を可能とするため、土地改良事業の特徴を活かし産業政策と地域政策の土台（インフラ）を整備する、というものであり、三つの政策課題と六つの政策目標のもと、九つの具体的成果指標を設定し推進されています。今後一〇年のうちに、農業・農村インフラの主要な農業水利施設の実に四割近くが標準耐用年数を超過する、というなかで、この長期計画のもと着実に課題を克服して行くことが豊かで競争力ある農業を牽引し、美しく活力ある農村を強化することに繋がっていくことでしょう。

世界に先駆けて超高齢社会を迎え、農家人口はこの三〇年で約三分の一に減少し、基幹的農業従事者に占める六五歳以上の割合は約三倍となっています。更に、食料自給率が先進国中ワーストワンの我が国にとって、農業・農村の活性化こそが成長戦略の一丁目一番地ではないでしょうか。我々施工業者は国土改変の担い手として先陣を切って土地改良事業に参画し、水と緑にあふれた美しく豊かな風土を次の世代へ確実に継承して行くことが使命だと考えます。

そして将来にわたり、いつまでも心癒される表紙写真が掲載されることを願ってやみません。